

特別展示 京焼の萌芽

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



エントランスホールの展示風景

京都市内を発掘調査すれば、各時代の数多くの焼きものが出土します。とくに桃山時代から江戸時代にかけての遺跡では、多彩な茶陶が含まれ、茶の湯が隆盛した時代であったことがよくわかります。これらの茶陶のなかに「軟質施釉陶器」と呼んでいる聞き慣れない焼きものがあります。初期の京焼と関連して、最近この焼きものが注目されています。

今回、この軟質施釉陶器と京焼とのつながりを紹介したいと考え、特別展示「京焼の萌芽」を開催することにいたしました。

ここでは、室町幕府が崩壊した天正元年（1573）以後から乾山が没する寛保三年（1743）までの間を扱いました。

写真パネルは、三条界隈の焼き

もの屋が描かれている「洛中洛外図」、軟質施釉陶器が出土した発掘現場や出土遺物で構成しました。

復元された金炭窯^{きんすみがま}や乾山窯^{けんざん}の出土窯道具も展示しております。また、採取した聚楽土で、当代の樂吉左衛門氏が実験的に赤楽茶碗を作陶された作品も展示しました。

遺物では、洛中や伏見で出土した様々な軟質施釉陶器を展示し、仁清や乾山までの京焼きの流れを追いました。特に押小路焼^{おしこうじ}に関する未成品を含む陶片は、京焼の背景を知る上で貴重な資料です。

これらの展示品を通覧すると、新規で独創的な焼きものを好んだ「京焼の世界」が再現されています。京焼の源流ともいべき軟質施釉陶器、新規作陶に挑戦する初期京焼の姿がよく現れています。

京焼の魅力は現在も生き続いています。京都の歴史文化に思いをはせながら、展示を通じて、出土京焼の更なる魅力を引き出す機会にしていただければ幸いです。

最後に、快くご協力いただいた法蔵禅寺や立命館大学文学部を始めとして、ご協力いただいた方々に深く心よりお礼を申し上げます。



京都で最も古い軟質施釉陶器の出土品
(16世紀末～17世紀初頭)

鉄分を含んだ粘土をロクロ成形し、緑彩を施して、乳濁した透明釉を掛ける。内面は、暗緑褐色の釉を掛けて黒く見せる。



メインケースの展示風景



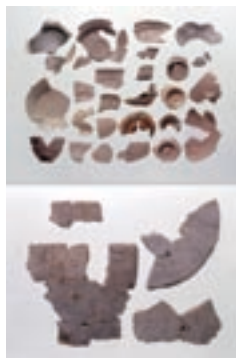
屏風絵の金雲を模した緑彩を上下に施し、中央に吊り橋と葦を描く吊り橋の赤みを帯びた地色は、釉の下に塗られたベンガラの発色が、三条界限の焼物屋跡から出土した、軟質施釉陶器の鉢。

(中京区中之町)

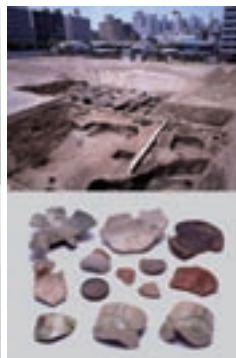


初めて仁清・乾山を遡る軟質施釉陶器の生産地を確認した調査地の全景。軟質施釉陶器が生産されていたのは元和6年(1620)から慶安3年(1650)の頃です。

(中京区元本能寺南町 旧本能小学校)



出土した軟質施釉陶器(上)には、釉薬を掛けて焼き上げた製品と素焼の未製品があり、これらを焼いた内窯と蓋(下)も出土しています。出土総量は、1,035片におよび、多品種で少量の生産であったようです。



押小路焼の関連遺構が見つかった調査地(上)と、出土した軟質施釉陶器と未製品(下)。押小路焼と真鍮製造工房の共同の大きなゴミ捨て穴から見つかります。

(中京区東八幡町 旧柳池中学校)



楼閣山水文や山水文などを墨描きした器の素地や「音羽」の印銘のある色絵金彩碗、「岩倉」の印銘のある素焼の高台などが出土しています。釉薬を調査した坩堝は、東南アジアなどからの輸入品を転用したものです。



鳴滝乾山窯跡の出土品(法蔵寺蔵)と復原された金炭窯の展示風景



三条界限の焼物屋を描いた「元和七年(1621)」の銘を持つ洛中洛外図屏風(佐渡・妙法寺蔵)